

第1講 講義の背景と目的：講義の構成と理念

1. テーマ 古代ギリシア史：古典世界への道

2. 古代ギリシア史研究の二律背反

古典的教養主義の伝統：ホメロスなどの文学作品、プラトンなどの哲学書、トゥキュディデスなどの歴史書、パルテノン神殿などの古代建築、ミロのヴィーナスなどの古代彫刻・・・時代や社会を越えた人類共通の文化の源流

ギリシアの民族主義：祖先の栄光の時代

ギリシアの多民族構成（ギリシア人、トルコ人、アルーマニア人、ユダヤ人、アルバニア人など）

メガリ・イデアの挫折：ギリシア本土と周辺の小島嶼部に限定

小アジアからの疎外

ギリシア正教と異教の世界

古典的民族主義では定義できない

ギリシア人とは：

古代・・・ギリシア語を話す人々

現代・・・ギリシア正教の信者

暗黒時代（前1100年ころ-前750年ころ）をはさむふたつの世界・

ふたつのディシプリン（学問領域）（周藤芳幸『ギリシアの考古学』（世界の考古学③）同成社、1997年、173-4頁による。）

暗黒時代以前：文字史料の欠如（ミケーネ時代を除く）

考古学に依存

暗黒時代以降：文字史料に依存

3. 目的

バルカン半島の南部、ギリシアの地に文明が勃興し発展して行く過程を探求する。ギリシア史の性格は海に囲まれているという開放性、狭小な平野と浅い土壌、夏期に置ける極度の乾燥などの自然環境の影響を色濃く受けている。本講ではその特徴を探って行くことにしたい。

本講はギリシアにおける青銅器時代に焦点を合わせ、ミケーネ時代を頂点とするギリシアの青銅器時代に関する歴史研究の問題点と限界を探りながら、文化史としての再構築の可能性を提示することを目的としている。

授業は講義を中心に行い、小レポートを各授業前に課す予定である。

4. 講義の組み立て

- 1 講義の背景と目的：講義の構成と理念
- 2 アクロポリスと近代の刻印：歴史研究における近代の誤謬
- 3 ギリシア史の地理的背景：自然環境と文化史
- 4 古代ギリシア人の民族移動に関する神話と伝承：古代人が語る祖先の時代
- 5 ギリシアは文化の受け皿にすぎないのか：古代史をめぐる近代の言説
- 6 文化史の史料としての樹木花粉：人間と環境破壊
- 7 文化史の史料としての草本花粉：花粉と農業
- 8 花粉からうかがえる地方史：ナラとイネ科が語るもの
- 9 キラーダの歴史：考古学と花粉が描く文化史
- 10 ミケーネ時代の位置：新石器時代から鉄器時代への流れの中で
- 11 文明の勃興：中期青銅器時代との連続と連続
- 12 文明の興隆についての学説：地中海世界における交流
- 13 ミケーネ社会と国家モデル：ミケーネ社会はアジア的か
- 14 粘土板の世界：タブレットから見えるミケーネ社会
- 15 総括と評価：ギリシア史の特性

5. 成績評価

平常点 30%

レポート 70%